

米作りと共に伝えられた九州地方の土器

I-4

東北地方の弥生時代の始まりは、西日本より若干遅れて始まります。九州地方における弥生時代前期の土器を総称して「遠賀川式土器」と呼ばれますが、その系統を引く土器が名取市の十三塚遺跡で発見されています。これは土器と共に米作りの技術も当地に伝えられたことを物語るものと考えられています。

I-4

西日本と異なる 名取を含む東北地方 の弥生文化

I-5-①

名取を含む東北地方にも弥生時代の遺跡がありますが、九州などの西日本と比べて、環濠集落が発見されていない、出土遺物に金属製品が少ないという点に大きな違いが見られます。これは、東北の弥生人が西日本から、自分たちにとって有益な米作りの技術を取り入れ、必要性のないものは取り入れなかったのでしょう。これは、それまでの縄文時代から受け継がれてきた平和な生活風習を守ってきたことを教えてくれます。

I-5-①

石の剣が突き刺さった人骨

I-5-⑤-a



I-5-⑤-a



I-5-⑤-b

頭のない人骨

I-5-④



I-5-④

戦いの犠牲者

I-5-④



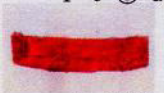
I-5-⑥-a



I-5-⑥-b

金属製品

I-5-⑥-a



I-5-⑦

鉄製手鐲

I-5-⑦

※ 環濠集落について

環濠集落とは、周りに濠をめぐらした集落のことです。環濠集落は、弥生時代前期に北九州地方に出現し、中期の段階には、関東地方にその分布が広がっていきます。濠を掘りあげた際の土を、外側に積んで土壁を築いていたとされる調査例がいくつか知られていることから、濠をめぐらす第一の目的は、集落を外敵から守るためであったと言われています。

また九州地方では、国や集落間で争いがあったことを示す人骨が出土しており、実際に戦闘が行われていたようです。

I-5-②

環濠で囲まれたムラ

I-5-③



I-5-③

横浜市大塚遺跡

I-5-③